



金沢コミュニティシネマ推進委員会  
代表  
シネモンド代表

土肥悦子

## 映画のない人生、映画のある人生

### 映画三昧の日々

ことの始まりは、自分が観たい映画を観るために始めた自主上映だった。1995年に金沢に来るまで、東京の小さな映画配給会社で買付けや宣伝を担当していた。とにかくたくさん映画が観たくて、日本の大学を卒業後、パリに留学して映画学科修士課程で勉強し、シネマテーク通いを続けた。日本が誇る映画監督である、オズ、ナルセ、ミゾグチを一気に観たのもパリだった。映画三昧の日々、そして映画会社への就職。映画があって当たり前の生活だった。

### 映画のない生活

ところが金沢に来てみたら、ミニシアター系の映画（※）を上映している映画館がなかった。金沢のイメージは「文化的な街」だったので、愕然とした。'95年当時、まだまちなかに映画館は12スクリーンあったが、メジャー系の映画のみでアジアやヨーロッパの映画、日本映画もミニシアター系の作品はほとんどかからないような状況だったのだ。観たい映画が観られないことはとても苦しく、ちょっとした酸欠状態だった。

「それなら、自分で上映をすればいい」と初めて開催したのが、「'96イラン映画祭」の自主上映。大入り満員の大成功だった。観客は潜在する。年に1、2回のペースで自主上映を続けたが、そのうち会場としていた109ホール（現シネモンド）が使用不可能となり（映写機の老朽化）、後先考えずに作ってしまったのがミニシアター「シネモンド」、1998年の12月のことだった。

### シネモンド

「人口40万強のまちでミニシアターをやっていくには、中心となる人間がちゃんとした給料を取らないこと。そうすれば、ぎりぎりやっていける」とミニシアター興業のプロが言った。「3年続けることができれば、あとは誰でもできる」「3年で軌道に乗せるのが、あなたの仕事」とも言われた。「やってみよう!」と即決した。お金が欲しくてやるわけではない。自分自身のために、ひいては金沢の映画

ファンのために映画館をつくろう。わんぱく盛りの2歳児とお腹にはもう1人いたけれど、なんとかなるさ…。

ユーロスペースと私個人とで出資して有限会社を作り、スタッフは全員バイト。自主上映のときから手伝ってくれた人たちだ。子供を抱えてのスタートだったので、現場は最初から若いスタッフに任せて、私は上映作品の選定、交渉を担当した。いずれ、私が金沢を離れるときは現場スタッフに映画館を譲るつもりだった。

開館して2年がたち、会員も1,000人を越え、地元企業に営業して「オフィシャル・サプライヤー」として映画館を支えてもらう仕組みを作ったりして、映画館経営が面白くなってきた矢先、夫の東京転勤が決まった。金沢に来て5年経っていた。現場はもともと私無しで回っていたし、東京なら作品選定もビデオではなく試写会に行けるから、それはそれでいいのかもしれない。2年間楽しませてもらったし、軌道に乗せるまでのあと1年は遠距離操作になるけれど、うまくいったらあとは現場スタッフに譲って、ぼちぼち映画の仕事を東京で探そう、と考えていた。

### 状況の変化

2002年。3人目の子供が東京で生まれ、0、2、4歳の育児に振り回されていた頃、シネモンドの主要スタッフが「そろそろ、30歳になるし、シネモンドのバイトだけではやっていけないから、別のバイトで稼いでシネモンドのシフトを減らしたい」と言ってきた。これがコミュニティシネマを考えることになったきっかけだ。まともな給料を払えなければ、後継者が現れない。ちょうど、郊外にシネマコンプレックス（複合映画館）が続々とあられ、まちなかの映画館が次々と姿を消したところだった。それまではシネコンとシネモンドで作品が競合することはほとんどなかった。小さな映画館経営は年間2、3本のヒットがあればなんとかやっていける。それがシネコンの数が増え、ミニシアター系でもヒット作はシネコンで上映されるようになり、収入が減少、スタッフの加齢によって人件費は増加することになった。

後継者がいない、経営が苦しいなら、畳むのがスジなのかもしれない。とはいえ、畳むことは考えなかった。一つには映画ファンのため、そしてもう一つは映画のため。年間4万人のお客さんがシネモンドでいろんな映画と出会った。そして、年間150本の映画がこの映画館でお客さんと出会ったのである。もともと映画がなくては息苦しい私が個人的な思いで作った映画館だったが、シネモンドはとっくの昔に北陸の映画ファンのひとたちの映画館になっていた。

コミュニティシネマという考えかた

ならばどうしよう。同じような悩みをほかの地方のミニシアターもかかえていた。このままでは日本の地方都市からミニシアター系の映画館が消えてしまうかも知れない。映画は観客が鑑賞して初めて完成する芸術・娯楽だ。このままでいいのか？

映画上映者たちが年に一度集まる「映画上映者ネットワーク会議」（現、コミュニティシネマ／上映者ネットワーク会議）が「コミュニティシネマ」という言葉を使い出したのが、ちょうど2002年のことだった。シネモンドのスタッフを連れて参加したこの会議で聞いた「コミュニティシネマ」という考えに私たちは飛びついた。

これまでシネモンドが行ってきた、多種多様な映画の上映、映画講座の開催、映画監督や俳優のトークショーなどは、“地域に対して文化的な貢献があり、公共性が認められること”“民間経営は困難であること”であるから、海外では映画の専門家が運営し、資金的には公共の支援を受けている公設民営の映画館「コミュニティシネマ」が行っている活動である、と調査発表されたのである。私たちがめざすべきは、この「コミュニティシネマ」だと直感した。（後掲「金沢コミュニティシネマがめざすもの」参照）

たとえば、金沢らしい町屋かなにかをリフォームして、まちのど真ん中にレトロな雰囲気の映画館ができたなら？ そこにはカフェがあって、好きな仲間と映画の話しができたなら？ 映画をみなくてもお茶ができたり、夜にはおしゃれなバーになったら？ 映画をみたあと、余韻に浸りながら、ふらっと街を歩けたら？ 東京にいかねければ観られなかった映画が見られたり、昔、心躍らせた名画が特集上映されていたら？ 自分でみたい映画を上映することができたなら？ そんな素敵な映画館があったら、金沢はより魅力的な街になり、金沢に住みたい、と思う人がたくさん出てくるんじゃないかな、と思った。

#### 金沢コミュニティシネマ推進委員会の3年間

そこで、シネモンドを中心に、フィルムコミッション、21世紀美術館などが構成団体となって、金沢コミュニティシネマ推進委員会を2003年に立ち上げた。そして、コミュニティシネマの実現に向けて3年間さまざまな活動が続けてきた。（後掲「金沢コミュニティシネマ推進委員会の活動」参照）

「金沢コミュニティ映画祭」「こども映画教室」「金沢コミュニティシネマ上映会／映画の極意」など。これらのイベントは、コミュニティシネマが実現されれば、こんなことができます、というプレイベ

ントである。イベント自体が目的ではなく、推進委員会の体力をつけることと、コミュニティシネマのPR、そして実績づくりが目的だった。とはいえ、どれだけ映画祭を続けても、コミュニティシネマ（映画館）はできない。イベントを続けながら、商店街への説明会をおこなったり、ボランティアスタッフを募集しては、説明会をしていった。



こども映画教室風景

そして、2005年8月、物件をさがし、構想書を持って金沢市に話しをしにいった。しかし、ソフトへの支援はできても（実際にしてもらっている）、ハードへの支援はそうそう簡単にはいかない、という。そこで「ハードルは何ですか？」と聞くと「市民の声があれば」というので、今年の1月、「まちなかに公設民営の映画館＝コミュニティシネマを作ろう」と署名活動を始めた。結果、3月末までに14,561名の署名が集まった。4月に金沢市に提出。先頃、回答がきた。それは、『要望については、真摯に受け止めたい。映画が芸術文化の一翼を担っていることは認識しており、金沢における映画文化の振興やまちなかの賑わい創出の観点から金沢コミュニティシネマ推進委員会の活動に支援をおこなっているところである。しかし、まちなかの公共施設での映画上映が可能であることや、民間によるシネコン計画も進められていることから、公設民営の映画館を市で設けることについては、難しい現状にあることに理解をしていただきたい。（全文掲載）』というものだった。この回答の「公設民営の映画館を設けることは難しい」という理由がどうもずれているように思う。「シネコンがまちなかにできる」ことを理由にしているが、シネコンがまちなかにできても、コミュニティシネマで上映する。“商業主義には馴染まないが良質な映画”は上映されることはないの、これは理由にならないし、「まちなかの公共施設での映画上映が可能」であることも理由にあがっているが、これはイベント上映に限られてしまい、常設の映画館としてのコミュニティシネマを望む私たちの要望に対しては、できない理由にならない

い。また、ここでの公共施設で映画上映を企画してきたのは他にもない金沢コミュニティシネマ推進委員会であり、金沢コミュニティ映画祭、映画の極意、こども映画教室などを公共施設で開催してきた。これで事足りるならば、コミュニティシネマを作ろうという運動を起こす必要もなかったはずだ。

大事なのはスクリーンの数ではなく、上映される映画の種類豊富さであり、スクリーン数がどれだけ増えても、上映される映画の種類はちっとも増えない、ことが問題だと訴えてきたが、この回答はそれを理解されず残念なものだった。

### 今後の展望

金沢コミュニティシネマ推進委員会を立ち上げたのは何よりも、シネモンドという多種多様な映画の上映拠点が存続の危機にあったからだ。ここではっきりさせておきたいのは、「シネモンド」という会社の存続を望んだのではないということだ。シネモンドがつぶれて、そのことでスクリーンが残るなら、会社自体はなくなってもかまわない。もともとミニシアター系の映画がみたくて作った映画館であり、その形態がどうであれかまわなかった。儲けなどなかった。せつかく作った上映拠点を映画と観客のためになくしたくなかった。

それでも「シネモンド」を公金で救うのか？という声は少なからずあった。「会社としてのシネモンドではなく、上映拠点、スクリーンを救いたい」と言っても、「甘い」「贅沢」「映画だけが文化、芸術なのか」という非難をいただいた。福祉にかけるお金もないときに、映画に公金を使うのか？映画が無くても生きていける、と。文化、芸術、スポーツなどは確かになくても生きていける。それでもそれらは人の心や体を豊かにするものではないのだろうか？音楽、美術、文学、みんなそうだろう。文化やスポーツは人を生き生きと輝かせる。

商業主義には馴染まないような、それでも上映する意義のある作品を上映していく場所を確保できないと、日本全国、どこでも同じハリウッドの映画ばかりしか観られなくなってしまうかも知れない。

コミュニティシネマというのはそれを解決する、理想的な考え方だと今でも信じている。しかし、公設の部分が本当に不可能なら、ほかの方法を考えるしかないだろう。目的は“金沢に映画文化を根づかせる”ことであり、そのために“多種多様な映画を上映するスクリーンをなくさないこと”なのだから。

映画はなくなるのか？

映画の国の住人は、みんな映画教（狂?!）の信

者で、映画を観ないと生きていけない。そして、映画のために何ができるかを考える。それは、きっと映画からたくさんの、数え切れない感動をもらったから。心躍るミュージカルも、お腹がよじれるお馬鹿な映画も、肩で風切ってしまう任侠ものも、妖しいめくるめく官能の世界も、胸がしめつけられるような事実をつきつけるドキュメンタリーも、映画はどれも素晴らしい。映画のお陰でどこにだって行ける、何度でも人生を生きられる。

映画がデジタル化して、もう映画館はなくなるだろう、フィルムはなくなるだろう、と言われて久しい。大勢の他人と一緒に感動を共有しながらもあくまでもスクリーンと一対一になれる映画館の暗闇はなくなってしまうのだろうか？映画はいつだって、人間や愛、勇気や信頼を描いてきた。それが人々の心に「感動」を残し、生涯忘れ得ぬ映画になる。「映画は魂で作るものだ。だから映画がなくなるとは思わない」とドイツの監督が言っていた。

映画が好きだから、映画に関わっていけるなら、ボランティアでも…という映画バカが、多かれ少なかれ日本の地方都市の映画文化を担ってきた。文化政策で街を再生することに成功したフランスのナントから来た文化行政官、ボナン氏は「日本のミニシアターがやっていることは、あきらかに文化事業であり、そういう映画館は文化施設でしょう。それを民間がやっていること自体、日本は驚くべき所だ。フランスならば、必ず行政が支援する。そしてその場合、絶対に内容に口を出すことはあり得ない」と言っていた。

もし映画館のない街に住むことになったら、私はどうするだろう。いや、そういう街には住まないことを選ぶだろう。それが許されなければ、きっと何とかして映画を上映できるようにかけずり回るんだろうなあ。

（※）全国一斉に公開されるメジャーな作品ではなく、東京でも一館のみで上映されるような映画



金沢コミュニティ映画祭の様子



## 金沢コミュニティシネマが目指すこと

### (1) コミュニティシネマが目指すこと

- ① 市民に対する映像芸術、映画文化の普及と振興
- ② 映画映像教育の実践
- ③ 地域に密着した活動

→つまり、地域における映画映像環境全般の活性化

### (2) コミュニティシネマでやること

【映画館／2スクリーン以上】

#### ① 多種多様な映画の上映

- ・ミニシアター系作品上映（2スクリーンになることで、1作品をより長期に渡って上映できる）
- ・金沢コミュニティ映画祭（金沢コミュニティシネマ主催事業／まちなか賑わい創出）
- ・自主制作映画の上映（若手映像作家の発表の場／人材育成）
- ・名画座としての役割（旧作の特集など）
- ・自主上映会（市民による自主上映企画をサポート）

#### ② 映画人との交流

- ・映画上映時に監督、俳優などを招聘、ティーチイン
- ・特集上映の講演（「映画の極意」金沢コミュニティシネマ主催事業）

#### ③ 映画映像教育の実践

- ・こども映画教室（金沢コミュニティシネマ主催事業／こども向け映画上映＋解説、ワークショップ）
- ・映画講座（メディア・リテラシー、人材育成）

#### ④ 地域に密着した活動

- ・おでかけ上映（高齢者対応の出前上映企画）
- ・フィルムコミッション（映画撮影誘致、サポート）
- ・カフェ（映画を観ない人も、観た人も）
- ・フィルムライブラリー（郷土に関連した映像作品、また個人所有の映像などを保存・管理）

### (3) コミュニティシネマの運営方法

官民パートナーシップの手法により、

- ① 映画館の建物は官が整備（イニシャルコスト負担）
- ② 民間の映画専門家に委託。独立採算で運営をする（ランニングコスト負担）

ことで互いのリスクを軽減する

\*たとえば、8千万円でリフォームして、運営は民間に委託して、維持費は入場料収入や、文化庁等の助成で民間が独立採算できる。実に良いコストパフォーマンス

### (4) コミュニティシネマの建物

新たに映画館をつくるのではなく、

- ① 既存の遊休施設、それも建物自体に人を惹きつける力のある建物を
- ② 映画館へとコンバージョンする

ことで経済的（コストパフォーマンスのよさ）なうえに、環境にもやさしい

## 金沢コミュニティシネマ推進委員会の活動

### ■「金沢コミュニティ映画祭」（2003・4・5年と3回開催）

文化庁、金沢市の支援を受け、まちなかで映画を観ることの楽しみや、通常の興業ではなかなか上映できない、ドキュメンタリー作品や、旧作、市民からのリクエスト作品を上映することで、映画の楽しさを再確認してもらう。3年続けてきて、開催を楽しみにしてもらえるようになった。

- 1 映画上映：金沢未公開作品を中心に十数本の映画を上映。ゲストも招聘（これまでは韓国から映画監督、青山真治監督、和田誠さんなど）会場は21美のホールとシネモンド。

- 2 まちなかイベント：商店街と協力して年に一度の映画のお祭り盛り上がるようなイベント満載でまち全体が映画一色になる。

- 3 シンポジウム：コミュニティシネマの実現に向けて、多くのゲストを迎えて討論。広く市民にコミュニティシネマについて知ってもらおうと毎回開催。

### ■金沢コミュニティシネマ上映会／映画の極意シリーズ

今年の7月にシリーズ第5弾を開催する「映画の極意」では、マニアックな作品からメジャーな作品まで幅広い観客層に向けて、テーマや映画監督で特集上映を組み、必ず講演をつけている。県外からわざわざやってくる観客も多い。

- 1「ジェームズ・コバーン／男の極意」：『大脱走』『戦争のはらわた』上映＋黒沢清監督講演
- 2「ニッポン映画／青春の極意」：『お引越し』『転校生』『櫻の園』＋みうらじゅん氏、山田五郎氏講演
- 3「フレデリック・ワイズマン／人間観察の極意」：『チチカット・フォーリーズ』『少年裁判所』『霊長類』『福祉』『アメリカン・バレー・シアターの世界』『DV・ドメスティック・バイオレンス』＋蓮實重彦氏講演
- 4「成瀬巳喜男／女性映画の極意」：『おかあさん』『めし』『鶴八鶴次郎』『夜ごとの夢』『妻よ薔薇のやうに』『浮雲』『まごころ』『噂の娘』『旅役者』＋山根貞男氏講演
- 5「鈴木則文／エンタテインメントの極意」：『トラック野郎・爆走一番星』『女番長シリーズ牝蜂の逆襲』『エロ將軍と二十一人の愛妾』『不良姐御伝 猪の鹿お蝶』『まむしの兄弟 恐喝三億円』『華麗なる追跡』『ドカベン』『多羅尾伴内』『文学賞殺人事件 大いなる助走』＋鈴木則文監督、柳下毅一郎氏講演★7月15・16・17日開催@21美シアター21

### ■こども映画教室

小学生を対象に、映画の原理や仕組みを楽しみながら学び、映画館に足を運んで多種多様な映画を観て、またそれについて考えたり、感じたことを発表することで、こどもたちが映画に親しみを感じ、ひいては映像読解能力や感性を豊かにし、また自主性をもってもらえるようにと始めた。教材（「映画のむかし」金沢コミュニティシネマ推進委員会発行）も作成、いまでは他の都市でも「こども映画教室」が開催されるようになった。

- 1 初等クラス：動かない絵が動き出す、その瞬間の歓びを体験してもらう。映画の原理、仕組みをワークショップを通してまなぶ。
- 2 映画サークル：こどもたちを映画館に連れて行き、普段あまり観ないような作品を鑑賞。鑑賞後に作品について感じたことを述べたり、画面に映し出されたことを話し合ったりする。時には監督の話を聞いたり、映画評論家の話をきくこともある。
- 3 こども映画館：金沢コミュニティ映画祭のときに、こどもたちに「上映」の仕事体験をさせる。もぎり、舞台挨拶、また初等クラスで作成した、視覚のおもちゃを展示、発表。映画サークルのように、上映した映画を鑑賞後、会場の子供たちと話し合い、発表をする。（こども映画教室は原則的にこどものみの参加だが、この「こども映画館」は一般の大人も参加できる）
- 4 中等クラス：写真を4枚えらび、並び替えてストーリーを作る。映像の編集、物語の構成をまなぶ。また、写真を撮影して、先に考えたストーリーを表現する。つぎに、ビデオカメラ、録音機材を使い、既存の映画の一シーンを撮影する。機材の使い方、スタッフの役割をまなび、友だちと協力しながら撮影をすることで、コミュニケーション力を身につけ、映画撮影について知る。